

ある女

申京淑

(辻本武 訳)

私は彼女を一度だけ見たことがある。それも四年ぐらいに前に。他界した詩人の名前で一年に一回ずつ後輩の作家や詩人に基金から奨励金が授与される席上であった。被授与者が彼女であり、授与の場所は博物館前の韓国出版人協会の四階の講堂であった。今も思い出す。私を驚かせた彼女の第一印象。私は、彼女の背がちよつと高くて体格もある、そんな姿を想像していた。誰かがそうと言ってくれたわけでもないが、そのように考えていたのである。それは彼女の作品から受ける印象からであった。その日、私は仁寺洞の「銀と木」という店で、彼女に手渡すプレゼントとして、一羽の青い鳥が刻まれてチャリンという音の出るメダルの付いた銀のネックレスの代金を支払った。「銀と木」の主人は黄色が巻いている小さな箱に白い紙を敷き、その上に銀のネックレスをそうつと置いて蓋をし、それをまた紫の韓紙で折れ目一つ間違いのないように包んでから水引で注意深く結んだ後にも、松葉ボタンほどの大きさの造花一房を付けて、可愛い紙バッグに入れてくれた。「銀と木」の主人が銀のネックレスを包装するのにどれほど誠意を込めているのかを見た私は、本当に心温まる気持ちであった。ところでこれを持って彼女と初対面をした時、私は思わず銀のネッ

クレスが入っているそのバッグを後ろに隠した。彼女の顔を見るや反射的に取った行動であった。彼女は非常に小さく黒かった。どれほど小さく黒かったのか、その小さく黒い姿から漂ってくる雰囲気がいままでどんなに辛酸をなめてきたのかを語っていて（彼女は私と同じ年だ）、私はそれだけで気が滅入ってしまったのである。竿みたいの高い私の背と丸々として白い顔が、その時ほど恥ずかしく感じたことがあっただろうか。後日、彼女は私が白い顔をした大柄の女ということに驚いたと語った。互いに違う姿を想像していたというわけだ。その時、彼女は若い時に結婚したが離婚して、二人の娘を一人で育てているところであった。過酷な人生にぞつと身震いしながら生きて来た彼女の姿は、どんな飾りも必要ないように見えた。ところでプレゼントとして持って来たものが銀のネックレスとは……。その上に水引で結んだ包装とは……。当惑してポーンと立っている私を、誰かが彼女のところに連れて行った。「やあ」、彼女は私を見つけて名前を呼び、手を差し出した。黒くて痩せて、そして小さな手だった。私が彼女と握手するためには後ろに隠していたプレゼントを前に出さねばならず、元気のない声で「プレゼントです。」と言って、彼女に手渡した。彼女は白い歯を見せてにっこり笑った、「このように来て下さるとは思いませんでした……。」と言いながら。彼女の白い歯と声を聞いてようやく固まっていた心がほぐれた。やつと私が思っていた彼女になったというわけである。私たちは実際には会ったことがなく、互いに作品を通してだけで相手方を知っていたのである。彼女の方だったか私の方だったか、二人のうちどちらかが最初に電話したのだ。互いの作品について、それほど悪い感情は持たなかったからだろう。どちらが先に電話したにせよ、

そのころの私たちはしょっちゅう電話で話し込んでいた。日が暮れる頃に、あるいは早い朝に、普通なら彼女と電話を始めれば三〇分、四〇分は話しするようになった。私の生活は単調で彼女の生活の話は無尽蔵であったから、主に話は彼女がして、私は聞く側であった。作品の話をするれば、彼女は恥ずかしくてどう言えば分らないと言っていた。「アイゴ、誰が私に向かって小説家と言うんでしょう？恥ずかしくて、どうしていいか分からないよ。」と言いながら。彼女は南島で暮らしていて、彼女が住んでいる所が私の出生地とそれほど遠くなかった。時おり彼女から幼年期によく聞いた「ムジンジャンハゲ（ぎょうさんに）」「チンホダンハゲ（すごい）」「クレプロツソ（やってしまった）」のような方言を聞くようになると、電話のこちら側で大笑いしたものだ。そして笑った後にはいつも、ひりひりする郷愁が余韻として残った。私は自分の生まれ故郷を離れてから旅人のように生きてきた。どこへも定着できないままいつも流浪している気分になり、帰ろうと思えば帰ることも出来たのだが、いつの間にかこれに慣れてしまった。今もそこに父母が住んでいるので何度もしそこに行くのだが、もはやその土地はここよりも馴染みがなくなっている。しかし誰でも幼い時は懐かしいもの。彼女からは、私の幼年期に周りにいた人たちの方言と食べ物匂いが流れ出した。彼女との電話での話の中には、私を「アイゴ、うちの可愛い子ちゃん」と呼んでいたコモ（叔母）や、故郷に挨拶に行ったら幾度も折り畳んで耳に挟み込んだ千ウオン札一枚を「車賃の足しに使え」と手に握らせてくれたタンスクモ（親戚のおばさん）が存在していた。

四年前に銀のネックレスを持って行ったその会場には、私は長くいておられなかった。彼女がす

ぐに次の約束があるからと言って彼女が会場の前席へ歩いて行ってしまふのを見届けてから、私は家に帰った。それから今まで彼女と再び会うことはなかった。電話での話も、あの時のようにしょっちゅうは出来なくなった。一年に二回か三回ぐらいか？その間に彼女は再婚をし、男の子をもう一人産んだ。私たちは互いに何から何まで知っていると仲ではない。彼女がそこでそのように暮らしているように、私はここでこのように暮らしている。ちよつと前に、私は彼女のサインが入った新著をもらった。彼女が二番目に出した小説集だった。読んでみて、葉書でも一枚出すつもりにしていたところ、数日前の遅い午後には彼女から電話がかかってきた。ほぼ一年ぶりの電話だった。電話の向こう側の声が彼女だと分かって、私は飛び上がるほどに嬉しくなった。電話をもらうのがこれほど嬉しかったのは何年ぶりだったか…。

*

何をしていたん？

何となく…何となく、家にいただけだよ。

何か用事しているのに、うちが邪魔したんじゃないの？

いいや、違うわ…ただボーっとしてただけだから。このごろは、どのように暮らしているの？子供が三人もできて、時間がどれくらい経っているのかも分からなくて、無我夢中だからね。

うちら、前に電話で話してから、どれくらい経つかねえ？だいたい一年は経ってるみたいね。

それくらいでしょうね。：：子供のご飯作るだけでも忙しいでしょう？

子供だけにご飯を用意してやってるんじゃないかと：：朝に目を覚ましたら鶏も餌をくれと、ちよこちよこ付いてきて、アヒルもそうだし：：子犬もそうだし：：うちはご飯を作ってあげているだけの人間というわけなんよ。

本当にそうみたいだわ：：私は自分のご飯を作って食べるのがやつとよ。無精だから二度の食事、きちんと食べることもないしねえ。目が覚めたら一〇時なので、いつ三食食べられるのよ！ あ、そうだ：：本を送ってくれたでしょ、ちゃんと受け取ったわ。後記が気に入ったわよ。

恥ずかしいんだから。それで、後記のどこ？

一番最後のところ：：「子供をちゃんと育てて、身体と心が健康であることだ。」

それ、よく書いたってこと？うちは恥かも知れないけれど、それでもその言い方を是非ともしたかったんよ。うちが病気すれば、子供たちはどうなるの。一人じゃなく三人もいるんだよ。

本質が感じられたのよ。

本質？

そう。無駄を全部省いて減らして、本当のところが残っているもの。

そのように言われると、うちが素晴らしい人間みただね。

：：素晴らしいわよ、もちろん。子供を三人も育てているなんて、すごく素晴らしいわ。

不覚にも産んじやっただよ……。

……。

このように暮らすようになると考えていたのだったのかねえ……ある日子供ら三人を寝かせておいて眺めて見たんだが、どつと怖くなるんよ。うちが本当にこの子らを産んだのかってねえ……信じられなくてねえ。怖いもの知らずで、何とまあ三人も。それからというもの、最初からそんな考えをせんことにしたんだ。ただ病氣しないで子供らをちゃんと大きくせねばねえ。それに、うちもこのように生きるとは言ってなかった……。

「だったら、どのように生きようと言ってたの？」

「あんたみたいに生きようと言ってたんよ。気楽だろう。ご飯食べなくなったら食べ、寝たくなったら寝て。うちもそのように生きようと思ってたんだが、人生思うようにならんもんだ……へへっ。

「私みたいに？ アイゴ……ところでご主人は？」

「ソウルにいるよ。」

「ソウルに？」

「万年学生じゃよ。八〇年代に学生運動してて学校に行けなかったんで、今また行くって言ってるよ。漢方医学部も医学部と同じだね。六年間……もう三年行ったんだけど、それでもまだまだ遠いねえ、もう。昔もそうだったし今もそうだけど、うちは旦那がいてもいなくても一人じゃね。一人で子供を育てて、働いて……それでも夏休みの時に帰ってきて仕事もいっぱい手伝ってくれて、帰

って行ったよ。うちが農業をちよつとやってたんだよ。

農業？

米作りをちよつとしてたんだ。去年の夏は雨が多かったから駄目だったけど。考えてみれば、よくやったと思うんだ。一年に二石はできたんだから。

米はどのようにして作るの？

どのようにして作るだなんて……苗代をして、田植えをして、そのようにして作るんだよ。特別なことはあるものか。

(ぐしゅんとなる)

そこで暮らすのは、どう？

退屈だよ。

退屈だつて？ 子供を育てて、農業して、本を出して、それなのに退屈するほどに暇があるの？ 村はみんな年寄りばかりなんだ……ある時、うちがそこで何をしてるのか……思つて。若者は私だけという村だからねえ。寂しいつたらありやしない……村の年寄りたちは、ここで暮らしてくれるのが有難いと言つてね。何だかんだといつても若いのだから。柿が実れば取つて家の板の間に置いていくし、畑で茄子を取つて塀の上に置いてくれるんだよ。それは嬉しいねえ。何でも持つて来てくれるのだから。誰が置いていったのか分からないよ。いつの間にか置いていくのだから。それでも去年は面白かつたよ……何、女性の映画監督がいたでしょう。『三人の友達』を作った人！

ああ、知ってるわよ。

『三人の友達』見た？

うん：：誰かに見ると勧められて見たわよ。それで、その監督が何で？

去年、六ヶ月ぐらい、ここで暮らしたんだ。村で空き家を借りて後輩らと住んでいたよ。映画監督は本当に心根のやさしい人だった。だからその間楽しく暮らした。図体が恐ろしく大きい人なのに心根が優しく暖かいんだよ。同情心があつて、何かがちよつと傷ついたら可哀そうだといって泣き出すしね。その人たちがいた時は、それはそれで面白かった：：いや本当に：：へへっ。

何で？

田舎に一度も暮らしてみたことがなかったみたいなのね：：うちを完全に動物虐待しているとかいつて追っかけてきて、もう。

何で？

あんたは田舎で暮らしたことがあるから分かるだろう：：家で犬を飼ってるのよ。一匹じゃなく何匹も。田舎ではみんなそうだよ。ご飯食べさせなきゃならんし、なぜご飯食べんのか！とすぐに大声も出すし、すり寄って来たら足で蹴ったりもするし：：そうだよ？

そうですよ。

その映画監督が、うちが犬を蹴ったといつて涙ぐんで、なぜ言葉がでない動物を足で蹴るのかと：：泣き顔になって、もう。もう一度は犬にご飯を出すのがちよつと遅くなったの。そしたら、

言葉のできない動物になぜご飯が遅いのかと……そういつてうちを責め立てたんよ。正直言つて、うちの子供も遅いご飯を出す時もあるし、時にはご飯を抜くこともあるし、そうだろう。そんな状況で、どうして犬のご飯をきちんきちんと仕度できるというの？ 遅くなる時もあるし……。そんなこともある。そうだろう？

そうねえ。

それでうちが癩にさわつて、心臓の弱い映画監督にこんな話をしてやったの。うちは夫がどこか体の具合が悪くなつたら犬の脳髓を食べるとよくなるというので、犬を犬焼酎の店に引つ張つていって犬焼酎を作つてくれ、犬の骨髄も取り出してくれと言つて、夫に食べさせたりした人間だ……へへっ。

そうしたら？

顔が真っ青色になつたよ。「どうしてそんなことができるのか？」つて表情だつたね。凶体がこれぐらいの人が、ネズミ一匹も捕まえられないくせに、慌てふためいてよ。

ネズミを捕まえるのは凶体とは関係ないでしょ……田舎ではうちの母もネズミを捕まえられなくて、ネズミをみたらやたら逃げ回つていたわよ。なに、ネズミは逃げる途中で目を剥いてじろつと見るでしょ。そうなつたら怖くない？

怖いなんて、もう。けど、あんたも全く同じだね。ソウルっ子になつてしまつたようだね。

いや……私は最初から捕まえられなかつたですよ。それは遺伝みたいですね。母が捕まえられな

いのに、私がどうして？

そんなに大きなネズミでもないのに。なに、ハツカネズミがあるだろ、動物園みたいな所で蛇の餌になる小さなやつ……そんなのが一匹、流し台の下にいたってよ。顔を真つ青色にしてうちの家にやって来て、うちにネズミを捕まえてくれたって。捕まえに行つてあげたら、捕まえたらあの田んぼか畑にでもどこか遠くへ放してやつてくれと言うんだよ。アイゴ、ほんとに。そのネズミがどこをうろちよろしているんか、ということだよ。病気をうつしたりするし。ネズミが多くなると、人も恐れなくなるんよ。先だつて下の村では、寝ている赤ちゃんの指をネズミが食いちぎったとかで大騒ぎになったし。そんなネズミを放してやれつてねえ。

そうしたら？

胸の内では、ふん。一緒に行つて捕まえたんだ。逃げもしなかったね。新聞紙でばつと覆い被せたら、そのまま捕まつて身動きしなかったんよ。掴んで出て、その映画監督に言つたんだ。『捕まえた。遠くへ放してやつて来るよ。』……そうしてから、その家を出て田んぼにばつと放り投げたんだ。すぐに映画監督に、うちがちゃんと放してやつて来たつてね、言つたんだ……へへつ。

死んだの？

死んだらうね。

そのまま放つて置いたの？

まあ、お宅も同じだね。……この、うちの話を聞いて、お宅もうちを動物虐待した人物扱いする

のじゃないのかい？ 田舎で生活したら分かるだろうと言つてただろ。

いや……そうではなくて。

映画監督はうちを完全に動物虐待者だと烙印を押したねえ……その人が引つ越して来た時にうちが子犬一匹をあげたら、ここで暮らす間、一生懸命誠意をこめて育てますだと。愛玩犬でもないし、雑種の犬を蝶よ花よと育てたんだ。名前もつけてたよ。スンドリとね。その監督の名前の真ん中の字をとつてつけたつて。監督と子犬は、ちよつとやそつとではなかったよ。うちは町の人みたいに犬を抱いて歩き回るのは絶対に嫌だね。犬は犬なんだから。うちがどんなにしても、犬は自分の子じゃないだろう？ ないよね？ そうだろう？

そうだよ！

そんなやつをベッドに寝かしたり、美容院で毛を結んでやったり、食卓に座らせてご飯と一緒に食べたりするのを見るのは、うちは嫌だよ。そんなことが、いいのかねえ。ひよつとして、そんな犬、飼うというものじゃないだろ？

そうよ。飼っていないよ。

(もじもじ)

高霊にある何とかいう大学に出るようになって、監督がこの村を出ることになったんだ。別れる時、スンドリをうちに返しに来ただけど、板の間に座って三十分ぐらいスンドリの話ばかりするんよ。それでも足りなくて、紙切れに1, 2, 3, 4……と番号をつけて注意事項を書いて寄こし

たんだよ……アイゴ、ほんとに……。

何て書いてたの？

- 1、絶対に脳味噌を取り出さないこと。
- 2、売らないこと。
- 3、もし飼うことが出来なくなつて他の家に渡す時は、その人が本当にスンドリを愛することを
 確約させ、身元を確実に把握してこちらに送ること。
- 4、足で蹴らないこと。
- 5、ご飯は定時にあげること。
- 6、一日に一回は首を撫でてあげること……

(大きな笑い声)

そんで……そうしてから、心配なことが出来たんだ。

何が？

ともかく映画監督が出て行つたんだが、スンドリとの別れの場面を、どのように表現したらいいのかね。涙なくして見れなかったよ。監督も犬も、二人とも泣いたんだよ。あんたは犬が泣くのを見たことある？

見たことないわねえ。

本当に泣いてたんだよ。監督が行ってしまつて一週間、ご飯もちゃんと食べなくて……目の下を濡らして座つてばかりしていたんだ……ここではまだ五日市が立つんだ。市の立つ日に何か買おうと思つて市場に行つて帰つてみたら、スンドリがいなくなつていたんだ。アイゴ、ほんとに。うちが子犬を一生懸命探したんは初めてだよ。村の中をくまなく探して、子供を連れて「スンドリや、スンドリや」と呼んで、よその村まで行つてみて、田んぼ……も畑もみんな探したんだけど、いないんだ。うちは監督に合わせる顔がなくて、電話できなかつたんだ。

どこに行つてたの？

うちの考えでは、自分が珍島犬であることを知つて、うちがいない間に監督を探して行つた……どこに行つたのか。途中で交通事故にでも合わなかつたらいいんだけど……そうでなくても、犬さらいが捕まえていくんだよ。ここはいまでも犬さらいが来るんだよ。……まあ、大きな自転車の後ろに網で作つた犬を入れる箱を載せて回つてる犬さらい、知つてる？

知つてるわ。……私、子供の時にいっぱい見たわ。それで、そんな人が今もいるの？

ここは田舎なんだから。

うん。

うちもそんな人に一匹売つたよ。鶏を一・二羽、噛みついて、それも卵を産む鶏をむやみやたらに噛みつくんだから……その度に庭がどれくらい、うるさかつたか。憎たらしくて、そいつをどう

しようかと思つていたんだが、犬さらいが売ってくれと言つてやつて来て……それでその憎たらし奴を売ってしまったよ。そうしてから、庭が静かになったんだ。

……。

それでもスンドリを探したんだけど……どこにも、いなかったんだ。うちが本当にスンドリを探し回ったのだから、村の人たちが言つたんだ……人でも動物でも、みんな自分の行く道というものがあるもんだ。探すだけ探してもいないところを見れば、スンドリも自分の道を行つたのだろう、もう探すのは止めたらどうか、と言うんだ。それでその言葉に慰められて、探し回るのを止めたんだよ。

……。

うちが自分のくだらない話ばかりをしたみたいだね。

そんなこと、ないわよ……ものすごく面白かつたわ。ところで本はどう？

何を？

ちよつとは売れてるのかしら？

アイゴ、そんなこと、うちは思つていないよ。初版の印税だけ受け取つただけど、ここの村の人が一年農業して儲けるよりは多くて、すまなくてね……。

*

電話のこちら側と向こう側が違うように、彼女と私は全く違う人生を送っている。私はこの都会に一人で、彼女は南島の田舎で子供三人と一緒に。私がこの都会のビルディングにかかる霞んだ月を見る時、彼女は庭に下りて木の枝にかかる澄んだ月を見るのだ。私が週末に映画館に行つて深夜映画の「シックス・センス」を見ている時なら、彼女はおそらく今二四ヶ月になった子供の胸に布団をかぶせてやつて、ほっぺにキスをしているだろう。電話を切ろうとした時に、彼女はこの南島に一度訪ねて来いと言つた。彼女の家の近くに泰安寺という寺があつて、そこに寺男が一人暮らしているという。

「その寺で生まれて、そこで今まで焚き付け仕事をしてきたんだが、今はその寺でも火を焚くことがなくなつて、庭を掃除しながら暮らしている人で、年が六〇過ぎくらいか、全く年取らないよ。まるでリスみたいなんだよ。歩く足がどれだけ早いか、ここにいたかと思えばあっちにいて、飛び回っているのだから。顔、その顔を見せてやるから、遊びにおいで。見ておくだけの値打ちがある顔だよ。」

と言つた。私は冗談で、

「その人はあなたのアレなの？ 見せてくれるの？」

と言つたら、彼女はまたへへっと、笑いながら……

「誰にも会わないんだ。うちと一緒なら会えると言つてたよ。」

私は必ず遊びに来いという彼女に「そうしましょう」と口約束をして、彼女の名前を親しみ込めて呼んであげた。

「年を取らないでリスマみたいな姿の寺男を作品に書いて、世の人たちに見せてあげて下さいね。」と付け加えた。彼女はまた「へへっ。」と言って笑った。またどれだけ話をしたのか。電話の向こう側の彼女と別れの挨拶をしたら、部屋の中は暗くなっていた。受話器を置いてしばらく座ってから電気を点けた。手を洗おうと洗面所に行って、鏡に映る自分の顔を見た。彼女との通話が嬉しかったのだろう。私の明るい顔に目尻が今も笑っているのだった。

『ベストセラー』一九九八年十一月 創刊号